

特集

音楽で愛を語った作曲家たち

萩谷由喜子

愛の牧歌と最後の指揮を
妻に捧げたワーグナー

読響の2015年は《ワーグナー & チャイコフスキー 新春ガラ・コンサート》から幕が開く。ワーグナーとチャイコフスキー。このふたりには、実は共通項がある。ともにイタリアを愛したことと、敬愛する女性のために作品を書いたことだ。

まず、ワーグナー。若き日に4歳年上の女優ミンナと結婚した彼は、長い不遇時代に妻との仲も冷え、1849年にはドレスデン革命に連座して指名手配のお尋ね者になってしまう。

だが、15年後、彼の大ファンであるルートヴィヒ二世がバイエルン国王に即位するや、莫大な経済援助と快適な創作環境を手に入れる。このとき彼は、ライフワークの協力者として弟子ハンス・フォン・ビューローをミュンヘンに招く。ビューローの涙ぐましい献身が始まった。

ところが、その水面下で、ワーグナーとビューローの妻コージマの道ならぬ恋が進行していった。1870年8月25日、ワーグナーがついにコージマと結婚式をあげたとき、ふたりの間にはすでに1男

2女が誕生していた。

その年のクリスマスの早朝、前日に誕生日を迎えたコージマのまどろみは、極上の調べによって心地よく破られた。ワーグナーの弟子たちが自邸の階段に腰を下ろし、ワーグナーが妻への誕生祝いとして書いた愛の牧歌を演奏していたのだ。長男の名に因んで〈ジークフリート牧歌〉と命名されたこの曲には、同名楽劇から引用した旋律の他、コージマの好んだ民謡や子守歌の旋律も盛り込まれている。

1882年夏に念願の第2回バイロイト音楽祭を実現させ、人生の総決算ともい



ワーグナー(右)とコージマ

うべき〈パルジファル〉を初演したワーグナーは、秋からお気に入りの避寒地ヴェネツィアに移った。そして、コージマ45歳の誕生日にあたる同年のクリスマス・イブに、若き日の所産〈ハ長調交響曲〉をフェニーチェ座でみずから指揮し、その演奏を妻への贈り物とする。

これが彼の生涯最後の指揮となり、翌83年2月13日、同地でコージマの腕に抱かれて息を引き取った。

フォン・メック夫人に
捧げられた交響曲第4番

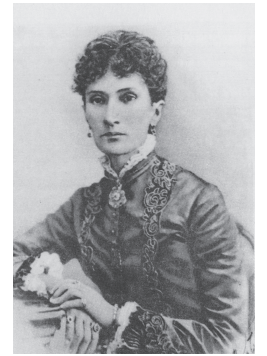
一方のチャイコフスキーはワーグナーのような無類の女性崇拜者ではなく、同性の魅力にも無関心ではいらなかった人物のようだが、そんな彼にも、心から敬愛を捧げた女性がいた。

1877年、彼は大富豪の未亡人、ナジェージュ・フォン・メックから、年6000ルーブルという多額の資金援助の申し出を受ける。ただし、顔を合わせることは避け文通のみで交際したい、という不思議な条件がついていたが、これがほどよい距離感を生み、彼はメック夫人との親密な手紙のやりとりで心を慰められるようになった。

そこへ登場したのが、モスクワ音楽院での教え子を自称するアントニーナ・ミリューコヴァなる女性だった。彼女は彼に一方的な思いを寄せ、激しく結婚を迫ってきた。その強引なプロポーズに押し切られ、7月6日、チャイコフスキーは



チャイコフスキー



フォン・メック夫人

彼女と結婚する。だが案の定、彼の繊細な神経は彼女の立ち居振る舞いのすべてを受け入れることができず、ついに、自殺未遂事件まで起こす。

一命をとりとめ、心身を癒すために外国旅行に出た彼は、翌年1月、イタリアのサン・レモ滞在中に、かねて作曲中の交響曲第4番をついに完成させた。曲はメック夫人に献呈され、夫人はこれを「わたしたちの交響曲」と呼んで生涯大切にした。

このように、《新春ガラ・コンサート》で採りあげるふたりの作曲家は、ともにイタリアを愛し、敬愛する女性に作品を献呈した人であったわけだが、愛する女性のために作品を書いた作曲家はこの両名ばかりではない。

新ウィーン楽派だって
音楽で愛を語る！

1月16日の《第544回定期演奏会》ではウェーベルンの〈パッサカリヤ〉、シューマンのピアノ協奏曲、ブラームスのピアノ四重奏曲第1番のシェーンベルク



シェーンベルク (左) とゲルトルート
Photo by Trude Geiringer & Dora Horovitz,
© Arnold Schoenberg Center, Vienna

による管弦楽編曲版が採りあげられる。実はこの4作曲家も全員、愛する女性のために作品を書いている。

意外なところで、先に新ウィーン楽派のふたりから紹介すると、まず、ウェーベルン。この人は初期には後期ロマン派風の旋律美にあふれる作品を書いていた。

没後出版された〈弦楽四重奏のための緩徐楽章〉もそのひとつで、彼がウィーン大学の学生だった1905年に、のちに妻となる従妹のヴィルヘルミーネと田園地帯を旅し、その満ち足りた思いの中で作曲された愛の音楽だといわれる。

ウェーベルンの師シェーンベルクも、音楽で愛を語ることにかけては弟子にひけをとらない。彼は1924年50歳のとき、愛弟子ルドルフ・コーリッシュの妹ゲルトルートと再婚し、当時作曲中の〈7つの楽器のための組曲〉作品29を、この26歳の若妻への結婚の贈り物とした。

クララを織り込んだ、シューマンの秘密の暗号

妻クララとの愛の物語によっても知ら

れる、ロマン派の旗手ロベルト・シューマン。

彼の作品番号23までの楽曲はすべてピアノ独奏曲だが、それは、ピアノ曲を通じてふたりが楽想を共有し合い、意思を疎通し合ったという事情を反映している。例えば、1833年に書かれた〈クララ・ヴィークの主題による10の即興曲〉にはクララの〈ロマンス・ヴァリエ〉作品3の主題が用いられている。

これとは別に、〈クララ・ヴィークの主題による変奏曲〉もある。これは、ピアノ・ソナタ第3番の第3楽章で、主題の出典はクララの〈ワルツ形式によるカプリス〉作品2の第7曲とみられる。

公的にクララに献呈された作品としては、クララ宛ての手紙に「このソナタは君に対するただひとつの心の叫び」と書かれたピアノ・ソナタ第1番があるが、その他の作品の大半も心情的にはクララに捧げられたようなものだ。有名な〈子どもの情景〉もクララの「あなたが時々子どもにみえます」の一言が契機となって書かれた。また、〈謝肉祭〉にはクラ



ロベルト・シューマン

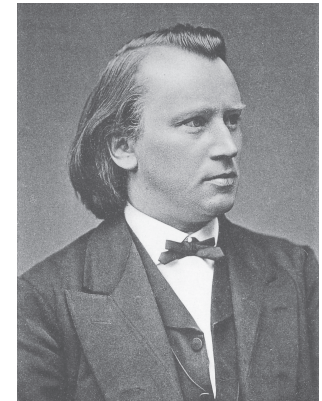
ラ自身が「キアリーナ」の愛称で登場する。シューマンはクララを自身の架空の音楽仲間集団であるダヴィット同盟の一員とみなし、その同盟員として、キアリーナ (CHIARINA) という名を与えていたのだ。

今回、金子三勇士氏の独奏するピアノ協奏曲を聴き解く鍵も、このキアリーナにある。この協奏曲の第1楽章の主題冒頭は、クララの頭文字「C」音からC-H-A-A (ド-シ-ラ-ラ) と下降する。クララの綴り「CLARA」そのままだと「H」音を欠くが、「CHIARINA」なら「H」を含む。「ド-シ-ラ-ラ」は、シューマンからキアリーナ、つまりクララへの、愛の呼びかけに他ならない。この愛の呼びかけは第2楽章からフィナーレへの橋渡し部分にも顔を出す。

なんと一途な愛だろうか。

高い山や深い谷から、君に何千回も挨拶を贈ろう！

シューマンからこれほど愛されたクララに、やはり音楽作品によって敬慕の情



ブラームス

を表現した作曲家が、クララより14歳年下のヨハネス・ブラームスだった。

ブラームスからクララへの正式な献呈作品としては、ピアノ・ソナタ第2番、〈ロベルト・シューマンの主題による変奏曲〉〈ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ〉があり、そのほか作品番号なしの数曲もクララに捧げられている。

でも、最高の贈り物はこれだ！

彼が21年の歳月を費やして書き上げた交響曲第1番の終楽章で、ホルンが待ちに待ったあの壮大な楽句を吹くが、この千両役者のごとき楽句こそ、クララへの贈り物だった。

彼はアルプスで耳にした羊飼いの角笛からこの旋律を着想し、1868年のクララ47歳の誕生日に、この旋律の手書き譜に次のような自作詩を添えて贈り物としたのだ。

「Hoch auf'm Berg, tief im Tal, grüß ich dich viel tausendmal !」

(高い山や深い谷から、君に何千回も挨拶を贈ろう！)

(はぎや ゆきこ・音楽評論家)



クララ・シューマン

2月公演の聴きどころ

渡辺 和彦

(わたなべ かずひこ・音楽評論家)

2月の読響は、《定期演奏会》(13日、サントリーホール)と《東京芸術劇場マチネシリーズ》(15日)が常任指揮者カンブルラン指揮、そして《読響メトロポリタン・シリーズ》(6日、東京芸術劇場)と《サントリーホール名曲シリーズ》(7日)は京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージックアドバイザーの広上淳一指揮で行われる。

11~12月公演に続く**カンブルラン**の今回の隠れテーマは“アメリカ”だろうか？ドヴォルザークの交響曲がアメリカと関係があるのは自明として、武満徹作品はサンフランシスコ響からの委嘱曲。そしてバルトークは、故国ハンガリーから逃れた亡命先のアメリカで、ヴィオラ協奏曲の完成直前に白血病で亡くなっている。協奏曲でソロを担当するのが、いまヴィオラ界で大変な話題を集め、12月にソニー・レーベルから新譜が出たドイツの奏者、**ニルス・メンケマイヤー**というのにも注目。1978年プレーメン生まれ。ケルン放送響の首席を経てバシメット国際ヴィオラコンクールで優勝、14年2月には武蔵野市民文化会館でリサイタルも行っている。この協奏曲の後に演奏されるのが、アメリカ最初の前衛作曲家アイヴズの謎めいた音楽〈答えのない質問〉というのも、何やら意味深い。なおこのプログラムは、3月に予定されている読響欧州ツアーのうち、ベルリン、ワルシャワ、ケルンの3公演での演奏曲目でもある。

広上淳一指揮の2公演は、**ボリス・ベルキン**(1948年ソ連／ロシア生まれ)を迎えてのロシア・プロ。広上&ベルキンは長い間、家族ぐるみで親交があり、これまで日本での共演回数も多い。〈仮面舞踏会〉の“ワルツ”は女子フィギュアスケートの音楽として使われて以来、ハチャトゥリアンの最も有名な曲の一つになった。ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲と第5交響曲は定番作品。特にヴァイオリン協奏曲は近年、チャイコフスキーの協奏曲と同じくらい演奏頻度が高くなった。

最後にもう一つ、東京芸術劇場との提携事業として、22日にはレハールの喜劇《メリー・ウィドウ》の公演がある。こちらはドイツ・マクデブルク歌劇場第1カペルマイスターの地位にあり、ドイツ語圏やハンガリーの歌劇場で広く活躍している**ミヒャエル・バルケ**の指揮。演出は“狂言界のプリンス”**茂山童司**。豪華歌手陣に加え、ある世代から上のオペラ・ファンには懐かしい往年のスター、**メラニー・ホリディ**がスペシャル・ゲストとして参加することになっている。